



Title	英語の前置詞：統語的および意味的特性
Author(s)	上野, 義和
Citation	大阪外大英米研究. 1988, 16, p. 233-260
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99131
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

英語の前置詞

—統語的および意味的特性—

上野義和
(1987.10.30)

after

(<ME *after*, *efter*<OE *æfter*)

OE *after* は ‘*af* ‘off, away’+*ter* ‘more’ で, *more away, farther off* の意味をもつ。OE の時代にすでに前置詞, 副詞の両方に用いられていた。本来は副詞であり17世紀までは動詞の直前に置かれることがあったが, 今日では *afterwards* の意味で ‘long after/soon after’ のように後置詞的に用いられる(荒木, 宇賀治 1984, p. 499)。

〈意味〉

現代英語における *after* の中核的意味は「順序」である。 *after five*(時間)/*seek after wealth*(追求)/*be named after his uncle*(模倣)/*get tired after hard work*(結果)/*day after day*(反復)/成句として *after all*(結局, かかわらず) など, 通常辞書に記載されているこれらの意味はすべてこの順序という概念に由来している。ここで問題になるのは *after* が場所や位置を示しうる語であるかどうかである。たとえば *OED* には次のような記載がある。

adv. 1. Of place or order: In the rear, behind. (with *go, come, follow, etc.*)

prep. I. Of place.

†2. Of position: Behind. *Obs. rare.*

1380...Crist clepide hym Sathanas and badde him go after hym

‘Of place’ とされてはいるものの, これらはすべて順序を示すものであって, 「純粹に場所の意味」(日下部, 1971 p. 25) の *after* はどこにも見当らない。「場

所もしくは順序について (Of place or order)」という記載こそが *after* が場所表示の語ではない裏付けとなろう。*after* が場所表示の語であるならば次の問答は成立するはずである：

A: *Where* did you $\left\{ \begin{array}{l} \text{go to?} \\ \text{come from?} \\ \text{pass by the bus?} \end{array} \right\}$ B: **After* $\left\{ \begin{array}{l} \text{Bill.} \\ \text{the office.} \end{array} \right\}$

又場所副詞 *there* での代用はどうか：

An accident occurred $\left\{ \begin{array}{l} \text{*after Bill.} \\ \text{*after the office} \\ \text{there.} \end{array} \right\}$

after の反義語とされる *before* (～の前で) の場合はよい。

An accident occurred $\left\{ \begin{array}{l} \text{before Bill.} \\ \text{before the office.} \\ \text{there.} \end{array} \right\}$

又出発点表示の *from* との共起はどうか：

John reeled from $\left\{ \begin{array}{l} \text{*after Mary.} \\ \text{before Mary.} \end{array} \right\}$ (Cf. Lindkvist, 1976. p. 353)

たゞ一つ例外的に思われるものは次のような場合である：

A: *Where* should I put this NP? B: *After* the verb.

この時は ‘*after the verb*’ を副詞 *here/there* で置換できるが、これも結局は語をならべる「順序」を述べているわけで、‘*Where should I put this box?*’ のような純粹に場所に言及する場合には ‘*after*’ では答えられない (**After the door.*) 以上のことから *after* は場所表示の語ではないと考えられる。

〈歴史と意味〉

after と *before* は反義の関係にあるが、後者にのみ場所表示の力があるのは何故か。これは両語の歴史に関係がある。*OED* によれば *after* の「順序」の意での最古の例は1000年で、場所表示と記載されている *behind* の意でのそれは900年である。一方 *before* の「順序」の意での最古の例は1000年で、場所表示の *in front of* のそれは1698年 (名詞としては13世紀) である。*after* に場所の意がないのは、それより誕生の早い *behind* が存在していたからであろうか。*behind* は今日に至るまで他品詞に転換されることなく場所表示の語であり続

けている。他方 *before* には、*after* に対する *behind* に相当する語がないため場所表示も兼ねるようになり、それ故、‘in front of’ の誕生は18世紀近くになったと考えられる。

〈意味論及び統語論上の特徴〉

(1) *after*(順序) と *behind*(場所)

Shut the door *after* you (come in/go out). (入って／出てから戸をしめよ)/

Shut the door *behind* you (*come in/go out). (背後の戸をしめよ)

(2) *after* NP の位置

after NP が順序を示す時、前置すること (*Afther him, John bounced the ball) 及び到達点表示の NP より後置すること (*John rolled the ball into the ocean after him) も非文法的 (Gruber, 1976, pp. 71-75)。

at

(ME *at* < OE *æt*)

現代英語の *at* は曾てはゲルマン諸語に共通の語であったが、現代ドイツ語やオランダ語では消失し、英語の *to* に相当する語（前者では *zu*、後者では *toe*）に吸収されてしまった（英國南西部方言にも同じ現象がみられる）。スカンディナヴィア語では逆方向の変化が起り *at* が *to* を吸収し、不定詞を示すしるしに *at* が使われている（英國北部方言にも同じ現象がみられる）。

at の中核的意義は「一点」。本来一点という概念しかもちえない事物の表示（その典型は *at nine o'clock*, *at noon* などの時刻表現）、現実には三次元の事物を地図上的一点として表示 (*at London*, *at the station*) する力をもつ。歴史的には後者が古く、「*at+地名*」は8世紀、「*at+時間*」は13世紀に現われる (OED)。前者の用法には注意を要する。*‘at the station’* が現実には駅の内部を指す (*in the station*) のか外部を指す (*outside the station*) のかは不明である。駅という建築物のとらえ方が異なっているわけで、大切なことは対象となる事物を話者がどうとらえるかによって前置詞の選択が決定されるということである。同じ事物でも、平面との接触を強調するなら ‘*on the corner*’、内部を強調する

なら ‘in the corner’, 一点ととらえるなら ‘at the corner’ というように幾通りもの表現が可能になる。逆に言えば、使われている前置詞によってその事物を話者がどう見ているかがわかる。しかし、同時に at は他の前置詞、例えば in や on とは同列に論じられない特異な語であるという認識も重要である。Jack is lying *in* the corner *in* which Jill is standing/Jack is lying *at* the corner *at* which Jill is standing はいずれも正しいが、*Jack is lying *in* the corner *at* which Jill is standing は非文である。その理由は in が現実の具象性に言及する語であるのに対して、at は一点という抽象性を示すという、いわば本来違ったレベルに属するものが結合しているという点にある。さらにこの at のもつ抽象性は、at the telephone/at one’s books/at (the) table/at the wheel(電話中／読書中／食事中／運転中) 等の比喩的表現を生む。

〈静止状態を示す NP₁+at+NP₂ における制限〉

(1) NP₁ と NP₂ が互いに異種物である場合

(i) NP₂ がそれ自体で場所を示すか、又はある空間領域を占める物体を示す時、その構造は文法的である。

Jack is at the park/Jack is at the gate.

(ii) NP₂ が上記(i)の条件を満さない時、NP₁ はNP₂ より物理的に小さい物体を指し示さねばならない。

Your key is at the table/*The table is at your key.

(2) NP₁ と NP₂ が同種の物体を示す時、その構造は非文法的である。

*Jack’s car is at Jill’s car./*The oak tree is at the willow tree.

(3) NP₂ が生物を指し示す時、その構造は非文法的である。

*Jack is at Jill.

〈移動動詞との共起〉

(1) at は目標を一点としてとらえ、到達することが意図されるだけで、移動の完了は不明 (cf. to)。

Jack ran at the train {and got on.
but couldn’t catch it.

(2) at NP で NP が指すものは移動中であるなしは無関係 (cf. *to*)。

Jack ran at {the walking dog.
the oak tree.

〈接触, 非接触〉

NP₁ と NP₂ において NP₁ と NP₂ が各々指示するものが互いに接触しているかいないかについては at は中立。Lindkvist (1978, p. 69) によると, 'The dog lay at the wall' では犬と壁の接触は不明だが, 'She sat with the telephone-receiver at her ear' では耳と受話器は確実に接触状態にあるというが, その判定は前後の文脈によるしかなく, at そのものには接触, 非接触を示す力はない。

〈here, there との共起〉

around, from, in(to), out (of), near, on などは here, there と共にしうるが *at here, *at there は許されない。その場合には単に here, there で表わさねばならないことから, here, there には at が内包されていると考えられる (Leech, 1969. p. 163)。

at と to との意味関係については to を参照

before

(<ME *beforen*, *biforen* <OE *beforan*, *biforan*)

OE *beforan* は "be- by" + *foran* "in front" で, 本来は副詞。before の中心的意味は「場所」と「順序」。以下, 反義語の after, 類義語の in front of との比較による aftre の意味, 用法を記す。

I. before は二者間の位置関係を示すが, after はできない。従って, 前者は 'Where...?' に対する答え, 副詞の there による置き換え, 移動の出発点を示す from の直後に生ずることができる (in front of も同様)。

A: *Where* was she standing then?

B: { Before
*After
In front of } the post office.

A: Was Mary standing $\left\{ \begin{array}{l} \text{*after} \\ \text{before} \\ \text{in front of} \end{array} \right\}$ the post office?

B: Yes. She was there.

The enemy fled from $\left\{ \begin{array}{l} \text{before} \\ \text{*after} \\ \text{in front of} \end{array} \right\}$ us. (Lindkvist, 1976, p. 299)

II. $NP_1 \left\{ \begin{array}{l} \text{before} \\ \text{in front of} \end{array} \right\} NP_2$ における意味内容

上記の構造においては, *in front of* の場合少くとも NP_2 の指示物はその前面を NP_1 に向けていなければならない。*in front of* は17世紀末に現れた成句で, その中心語の *front* は13世紀から名詞として「顔」の意で使われていた (OED)。この原義は二者が互いに前面を向きあわせる (They sat in front of each other) 場合, 少くとも一方だけがその前面を他方に向ける (Bill was standing far in front of Mary in a queue) 場合の二種類の位置関係を示しうる。

III. *before* の派生的意味

in front of はその原義故に, 面をもたない事物と共にできず, 従って *before* が今日もっているような派生的, 比喩的意味をもちえない。‘to place the food before Bill’ の *before* には場所の意以外に ‘within Bill’s reach/for Bill to eat’, 又 ‘to sing before the audience’ には ‘in the presence of’, to protest *before* God’ には ‘in the sight of’ といった派生的意味が脈絡に応じてつけたされる。上例の *before* はいずれも *in front of* で代用は可能だが, その時は「正面」以外の意味はなく, また ‘Don’t cast pearls before swine.’ のもつ ironic な意味あい (Lindkvist, 1976, pp. 296-305) も出ない。

IV. *before* のもつ順序の意

物理的に位置が前後であるということは抽象的な位置の順位 (能力, 地位, 価値等) の概念に結びつく。さらに後者は時間的な順序を生む。移動発着動詞と結合する *before* にはその意が強い。John arrived before Bill/five o’clock.において *before* は ‘earlier than’ と同義であることは, *before* の前に ‘ten minutes/immediately’ などの時の副詞句を添えて時間を示してみると一層明

確になる。それ故 Quirk et al. (1972. § 6.30) は, before が前置詞として使われる時, 専ら時間を示すというが, 同じように時間を示す at, by などと違い, before は順序を基盤にしていることに注意しなければならない。このことは, 予め生ずる順序が定まっている二者の関係を述べる時, 時間差を示す副詞のうち正しい順序に言及するものはよいが, 他は非文を生むことによっても裏づけられる。

March comes $\left\{ \begin{array}{l} \text{just/immediately/right} \\ \text{*ten minutes/*soon} \end{array} \right\}$ before April.

but

(<ME *bouten*, *buten*, *boute*, *bute* <OE *buta(n)*)

OE *butan* は “*be* ‘by’ + *utan* ‘outside’” が原型で, 副詞, 前置詞の両方に使われた。接続詞への転用は OE 初期。場所の原義から除外 (=except) の意が生れたが, その背後には「内部でなく外部」という否定の意味が生きている。接続詞に転換して except that, if not の意から that not の意に転化し, 否定語を伴う動詞 (think, believe, know など) や否定の意味を内容する動詞 (deny, doubt, despair, question など) と共にしたり, 否定形比較構文で than に代用される (荒木, 宇賀治, 1984, pp. 531-535) 用法はすべて原義の否定の意味を基盤にして発達したものである。この意味変化は, but と同様「外部」の原義から非同件, if not の意を派生させた without のそれと類似する。

No body was there *but* me. における but を前置詞とみるか接続詞をみるかは意見がわかれ。but は直後の目的格を支配しているという統語的な理由から前置詞とみる (例えば Quirk et al, 1972, p. 297ff)。他方 but me は ‘but[that] I[was there]’ に相当する省略節 (elliptical clause) であると意味を基準にした見方 (例えば Curme, 1963, p. 319) がある。いずれもそれなりの根拠があるにせよ, 後者の考え方では but I と but me の対立, 即ち主格と目的格の対立の説明ができない。目的格のままで節にかえることはできない。純粹に形態上だけからみれば, but を前置詞とみざるをえない。but の品詞決定に

関してもっと問題になるのは but *Mary* のような通格の場合だろう。形態上区別がつかないから通格とよぶのだから、この but は前置詞、接続詞のどちらでもありうる。

〈NP₁ but NP₂ の制限〉

(1) 「but NP₂」は必ずNP₁より後置されねばならない：

*But me, everyone was tired.

Everyone but me was tired.

Everyone was tired but me.

(2) (イ) no, any, evey, all 等肯定、否定を問わず絶対的意味をもつ語句と共に起せねばならない (Quirk et al, § 6.49)。

*Many people
*Almost all people
All people
No one } but him went there.

(ロ) 最上級表現も可：He is the greatest man but the King. 同様に last but one(最後から二番目), next-door but one(一軒おいて隣り) が許されるのは last, next がそれぞれ late, nigh(=near) の最上級であるから。(イ)と(ロ)の内部構造は少し異なる。どちらの場合も NP₁ + NP₂ = all が成立しなければならない。(イ)は、「NP₁ + 述語」が表わす命題から NP₂ をはじき出すことを示す。(ロ)は(イ)という前提がまず存在し、さらに残った NP₁ の中から構成員の一つをはじき出すことを示す。

疑問詞が but に先行する構造は修辞疑問ととらえねばならない。ここでも but の原義が姿をみせる。

Who but him could have done it?

=No one but him could have done it.

(3) but NP の NP に対応する語句が必ず存在しなければならない：

*The window is never opened but in summer.

but の代りに except, save を使えば上文は文法的 (*Longman Dictionary of Contemporary English*. 1978. s. v. but²)。次の文は正しい。

The window is never opened in any seasons but in summer.

for

(<ME *for*<OE *for*)

OE *for* は古代ゲルマン語の仮想語 *fora* を祖とし, OE では同語から生じたとみられる *fore* と並存し区別なく用いられて, 副詞, 前置詞の二つの機能をもっていた (接続詞としての用法は12世紀以降)。

現代英語の *for* の意味用法は多岐にわたるが, その中心に位置するものは, 「代理」, 「利益」, 「交換」の概念であると考えられる。その原義は定かでないが, 日下部 (1971, p. 84) によれば, 源は ‘before’ で「おそらく或るもの前にそれに代って置かれるというような意味から代用交換の意味が生れ」たのかかもしれない。こう考えれば, *for* のもつ多くの意味のうち唯一異質な「期間」の意 (*for a long time*) も, 時間という点で *before* と結びつく。

for のもつ意味は互いに極めて密接な関係にある。

Tom did it *for* Bill (トムはビルにそれをしてやった) では, トムのそれはビルの「代理」行為で, それはビルの「利益」につながる。Tom bought a book *for* 1\$. では, 1ドルは本との交換物であり, Tom was punished *for* stealing. では, 「盗みの行為に換るものとして罰を受ける」ことからこの *for* を「理由」としてとらえることができる。OED では, これらの代理, 利益, 交換, 理由の意での *for* の最古の用例はいずれも1000年のものである。

〈*for* と移動行為〉

for は *be off/depart/head/leave/start/take off* など, 出発行為のみ表示する動詞と共に起する。この *for* は, *Where are you heading for?* (どこへ向うのか) のように場所指示の疑問文の答えになりうる (I'm heading *for* Boston.) が, *for* が *Where is Bill? He is beside the window.* における *beside* のように純粹に場所を示す前置詞ではないことは ‘*for Boston*’ を場所副詞 *there* で言い換えられないことでもわかる。上記の ‘*where ↔ for*’ が成立するのは Boston 自体が場所を示す名詞であるためで, 本来場所そのものを示しえない名詞の場合には成

立しない (*Bill headed for Mary.)。for は, 'from-to' と共に起して移動の全行程に言及する動詞(go, walk, run 等)と結合することもある (Bill *run for* a shelter.)。この for NP は副詞 there で代用されないことから, 出発動詞, 移動動詞と共に起する for は, 場所というより「目的物 (獲物)」を表示し, 結局は look, ask 等と共に起する for と同じ語であると考えられる。それ故, Lindkvist (1976, p. 206) は, for は場所の意味 (local sense) をもつ語であると言いながらも, 目的を達成しようと努める (endeavouring to achieve a purpose) 意味も感じられると述べている。

〈for/toward + 場所表示の名詞〉

for と toward は方向を示す同類語とされるが, その相異点を以下に記す。

(1) The magnetic needle points $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{for} \\ \text{toward} \end{smallmatrix} \right\}$ the north.

The clock hand points $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{for} \\ \text{toward} \end{smallmatrix} \right\}$ five.

toward は一点を示す語 (five) とは共起しないが, 方位という漠然とした方向 (north) と共に起することから, 「漠然とした方向」を示す語であることがわかる。他方 north five の意は for の目的物獲得の意と合わない。

(2) for, toward 共, 出発動詞, 'from-to' と共に起する移動動詞とは結合するが, be 動詞と共に起するのは for のみである。

The ship was $\left\{ \begin{smallmatrix} \text{for} \\ \text{toward} \end{smallmatrix} \right\}$ Southampton.

「NP₁ be toward NP₂」の構造が成立するのは, NP₁, NP₂共, 移動しない物を指示する時のみで, その時 toward は beyond の意をもつ。The flower shop is towards the hospital from here. (Leech, 1969, p. 187)。逆に for については, NP₁は必ず移動するもの (上例における乗物) を示さなければならない。

in

(<ME *in*<OE *in*)

ME 初期には語尾子音消失形の *i* が並存する。OED によれば Midland 方言

英 語 の 前 置 詞

で書かれた宗教詩 *Ormulum* には *inn* と *i* の両形が現れ、前者は母音及び *h* の前に、後者はそれ以外の環境に生じている。この傾向は南部方言で書かれた *Ancren Riwle* にもみられるが、*Ormulum* におけるような規則性はない。Chaucer 以後の標準英語では *in* が正規の形となって今日に至る。

今日 *in* は内部における位置 (to be *in* the room), 内部への移動 (to walk *in* the room) を示すが、屈折時代には前者を表すのに「*in*+与格」 (hē wunode on pāem huse=he remaired *in* the house) を用い、後者には「*in*+対格」 (hē ēode on pæt hūs=he went *into* the house) を用いて両者を区別した (日下部, 1971, p. 102)。屈折消失に伴い両者の意味上の区別が困難な現象を生じた。意味上状態動詞は前者を、*put*, *pack*, *insert* 等は後者を示すことに問題はないが、移動動詞の場合はあいまいさが生じた (to walk *in* the room: 部屋に入る——部屋の中で歩く)。このあいまいさを解消するために生れたのが *into* である。

〈*into*, *onto*, *upon* の歴史のちがい〉

上記の原因により *into* は OE の時代から存在していた。他方 *onto* は16世紀、*upon* は13世紀にといずれも *into* より誕生が遅い。これら三語の誕生の違いの最大の原因是、OE では *in* が内部を示しうる唯一の語であったことにある (同義の *within*, *inside* の出現は、各々12世紀, 18世紀)。*in* がなければ同じ概念を表示する語が他になかったが、他の二つの複合語はそのような切迫した事情がなかった、という需要の差がそのまま歴史の差となって現れている (*onto*, *upon* 参照)。

〈*in* との含意関係〉

移動動詞と共に起する *in* (又は *into*) は *in* を含意する。さらに *out of* は *in* を前提とする。

Tom went *into* the room. $\frac{\text{含意}}{\text{前提}}$ Tom was *in* the room.

← Tom was *out* of the room.
前提

Lindkvist の反論については *into* を参照。

〈in, inside, within のちがい〉

これら三語に共通する意味は、物体の内部への移動及び到達位置である (to go in/inside/within the room—to be in/inside/within the room)。以下に相違点を記す：

(1) in のみ比喩的な意味変化 (=状態) が可能：

Bill is in (*inside/*within) difficulties/trouble.

Mary is in (*inside/*within) a dress.

これら二文はいずれも 'Where...?' に対する答の文にはならず、「in+NP」を場所副詞の there で言い換えられない。二番目の文では 'dress' が具体物であるため、inside, within は場所の意味ではよい。

(2) inside, within のみ、「限度内」の意をもつ：

inside of a week, within a week (in a week は一週間たてば)。但し前者は米語 (日下部, p. 110)。又 within のみ境界を示す名詞 (limit, limitation, bound, boundary, border 等) との共起が可能 (Cf. Lindkvist. 1976, p. 61)。

(3) from と共に内部から出る意味を表わす時、in のみその反義語 out of (又は out) を使わねばならない。

Tom walked from $\left\{ \begin{smallmatrix} *in \\ out of \\ within \\ inside \end{smallmatrix} \right\}$ the room.

(4) in のみ逆行表現が可能 (Quirk et al., 1972, p. 316)：

The horse is in foil. \leftrightarrow The foil is in the horse['s womb].

(5) 三語とも、内部をもつ物体の間接的表現と共に起する：

Bill is standing $\left\{ \begin{smallmatrix} in \\ inside \\ within \end{smallmatrix} \right\}$ the walls (doors, fences, gates).

単数形にかわると in のみ許されない：

Bill is standing $\left\{ \begin{smallmatrix} *in \\ inside \\ within \end{smallmatrix} \right\}$ the wall (door, fence, gate).

inside, within は、「ある線を境にしてそれより内側」という限度、制限の意をもつ。境界線が前提として存在しているわけで、従ってこれら両語は常にその

反義語 (outside, without) のもつ「外部」という概念をその背後にもつ (Lindkvist. p. 53)。しかし *in* には境界線という前提はない。

into

(<ME *into*, *in to*<OE *into*, *in to*)

通常、移動動詞と共に起してある物の内部への運動を示す複合前置詞 (反義語は *out of*)。原始ゲルマン語では「*in*+名詞の対格」で方向を、「*in*+名詞の与格」で状態を示していた (OED. s. v. *into*)。屈折語尾消失に伴い、前者は *into*、後者は *in* の形で今日に至る。屈折時代の名残りは同じゲルマン語であるドイツ語の *in dem Park spazierengehen* (公園の中を散歩する) と *in den Park gehen* (公園の中に入る) の冠詞の屈折対立にみられる。

〈*in*, *into*, *in to* の区別〉

into と *in to* は以下の場合以外は交換可能 (イ) *to* が不定詞の一部である時 : They went *in to* look at the exnbition. (ロ) 内部をもちえないものを示す名詞の時 : We went *in to* a dinner. (Wood, 1962, p. 123)

in と *into* については、前者は内部での運動、又は状態 (to dance/stay in the room) を示し、後者は内部への移動を示すのが formal な用法だが、informal には後者の意味で *in* を使う (Perrin. 1965, p. 654)。Wood によれば She poured the water *in* the basin と She poured the water *into* the basin との間に、前者には単なる結果的な位置、後者には容器から容器へと水を移しかえる際の全行程、という意味の差があるという。これは、到達点表現の *to* の背景に *from* が感じとられるからであろうと思われる (*from* 参照)。

〈*into* と *in* の含意関係〉

移動動詞と共に起する *into* は必ず *in* を含意する。従って *in* は *into* を前提とし、さらには *out of* は *in* を前提とする。

Bill walked *into* the room. $\frac{\text{含意}}{\text{前提}}$ Bill was *in* the room.

← Bill walked *out of* the room.
前提

ただし, ‘be in NP’ が必ずしも移動動詞を前提とするわけではない。たとえば put, pack, insert 等は, come, go, run, swim などと違い, 移動の全行程を示す力がない (He went from X to Y. *He put X from Y to Z.) が, ‘into ↔ in’ の含意, 前提関係は成立する (He put the oranges *into* the box. ↔ The oranges were *in* the box.) と同時に, 非移動動詞では in の前提が常に into であるわけでもない (He packed the box *with* the oranges. ↔ The oranges were *in* the box. しかし, この二文は意味的なつながりが深く, 前文が後文を含意することは確かであろうが, 後文が前文を前提とするかどうかについては詳細な分析が必要と考えられる。「詰める」という共通義をもつ pack, stow 等は二つの形 (to pack the box *with* the oranges/to pack the oranges *into* the box) をもっていること, また類義語の ‘fill’ には一つの形 (to fill the bottle *with* water/*to fill water *into* the bottle) しかないこと等が複雑にからみ合っているように思われる。

Lindkvist (1976, p. 216) は to が at を含意するという主張の反例として ‘He went *to* the room—He is *in* his room’ の対立をあげているが, この反例には疑問の余地がある。at と to はその対象物を一点という一次元の世界に昇華させる力をもつ語で, それ故両語は意味上相補分布をなす。上例の ‘to the room—in the room’ は一次元の世界と三次元の世界という, いわば相異なるレベルの対立であり, ‘in the room’ の前提には同じレベルの into が存在していると考える方が論理にかなう。事実, 上例は He went *to* the room and went *into* it. としても何ら支障はない。‘He went *to* the room—He is *in* the room’ は文脈上の意味省略が行われたものと考えられ, それは ‘go to bed/prison—be in bad/prison’ などの成句にもあてはまる。

「移動動詞+into」の到達位置表現が to でなくて in であるのは, ‘go to X’ が ‘*be to X’ で表わせないこと (to 参照), 及び ‘go to X—be to X’ は成立するが at には三次元を示す力がないことによる (onto についても同じ)。

〈into の分析〉

John ran *below* the deck. の below が到達点を示す時, それは ‘to a place

(which is) below the deck' と意味上等しいことから、同様に到達点表示の into も意味論上は 'TO IN' の順序であるとするのは Gruber (1976, p. 66ff.) である。これに対して into は in の単なる文体上の変種 (stylistic variant) にすぎず、into は一語であって in と toとの結合体でない。to は at と意味機能上相補分布をなすもので into とは異った範ちゅうに属する語であると主張するのが Leech (1969, pp. 191-194) である。結論から言えば両者の主張はいずれも正しいと考えられる。into を移動、in を状態を示すとした場合、内部への移動という概念は内部にある一点に移動するということと意味論上は等しい故、Geuber の分析は正しい。しかし Leech 側からいえば、into イコール in で to は無くともよい。上述したように屈折消失以前は to は方向を示す屈折語尾であり、屈折消失の代償として一語で表されるようになっても、本来は名詞の語尾に付属するべきものであって、副詞の in の一部となるものではない。こう考えれば Leech の主張は歴史的には正しい。Gruber は共時的な意味論から、Leech は通時的だから、と違った立場から into をとらえていると思われる。

〈be 動詞との共起〉

移動後の位置表示は in が使われるが、into を使った例が Leech (p. 199) にあげられている。

The car is just into the garage.

Lindkvist (1976, pp. 48-49) にあげられている例の多くは、上例と同様、完了を強調する副詞 (already) や侵入の程度を示す副詞句 (a good way, well, halfway, almost)、頻度の副詞 (once, again) と共に起するものであるが、それらとは全く関係のないもの (Ebba was the first into the waren/someone has been into his brew/he was out of his bunk into some clothes) もある。この用法は必ず「完了」を意味する場合以外は許されない (Lindkvist) というが、現実には Leech や Lindkvist が支持するこの用法を否定する母国語話者は多い。

〈into NP の位置〉

(1) 方向、経路を示す表現より前置してはならない：

*John ran into the house in front of the tree.

上例は、「木の前にある家」の意ならよいが、「木の前を通って」の意では不可 (Gruber, 1976, p. 75ff.)。

(2) *Into the water she fell down.* は *She fell down into the water.* の倒置文であるからよいが、コンマで分離させることは許されない (**Into the water, she fell down.*). *Into* の代用の *in* についても同じ：従って *In the water, I pushed my sister while she wasn't looking.* (Leech, p. 192, Quirk et al., 1972, p. 334) は、「水の中で」は正しく、「水の中へ」は不可。

like

(<ME *like*, *ilik* <OE *gelic*)

OE *gelik* は二つの構成要素 *ge*-(ME *y*-) ‘together with’ + *lic* ‘body, form’ から成る。*like* は本来形容詞で, *se biþ gelic þaem dysigan menn* (=He was like the foolish man)—*Matthew. vii/Hire sune wass himm lic* (=Her son was like him)—*Ormulum* 3572 のように与格の名詞を支配した。名詞の屈折語尾消失に伴い、‘*like (un) to him*’ のように直接に (un) *to* を置くことによって後続する名詞が与格であることを示す工夫がなされた(この変遷過程は *near* に酷似する)。この構造は16世紀になってもかなり使用されたが、その後衰退する (OED)。

現代英語における *like* は, *Mary is like him.* のように名詞の目的語を支配することから前置詞の機能をもつ一方, *John is very like his father.* のように強意の副詞を伴ったり, *John is more/most like his father.* のように比較変化をもつことから形容詞の性格も兼ね備えている。それ故 Quirk et al. (1972) では、60数語からなる単一前置詞 (simple preposition) のリスト (§ 6.4) から除外されているかと思えば同書の別の個所 (§ 6.16) では前置詞と呼ばれたりすることが上記のような *like* のもつ複雑な性格を物語っている。しかし形容詞の機能をいっても上記以外の用法 (例えれば *like* とよく似た意味をもつ *similar* は限定的に使われる (e.g. *similar examples*) が、*like* には許されない (**like examples*) が許されない (数学では可, OED) ことなど他の形容詞とは異なる面をもつことからみて, Wood (1962, p. 140) のように ‘pseudo-preposition’ (疑似前置

詞)’ という名称も生れる。

I. like NP

He ran *like* an antelop. /She fought *like* a tigress. における *like* は統語的には前置詞である。意味的には、二つのものに共通する類似した性質や特性を表していることから *like* の接続詞の用法を生む (*OED* によれば16世紀) こととなったと推定される。

II. like + 節

- (1) *Do it *like* I told you.
- (2) I want a frock *like* Mary wears.

Wood (pp. 140–141) によれば(1)は非文で(2)は正しい文である。(1)は様態、方法の類似 (‘私が言ったようにせよ’) を表す副詞節であるのに対して、(2)は性質、特性の類似 (‘メアリーが着ているのと同じような服’) に言及している。つまり、(2)は ‘I want a frock *like that* which Mary wears’ の縮約文である。この ‘like that’ を ‘such as’ で代用することもあるが、(2)の *like* の用法は Curme (1935, p. 54) によれば ‘loose colloquial speech’ に属する。なお Bryant (1962, p. 134) によれば、(1)の用法は会話では普通 (common in speech) に生ずる。

III. like と as

The description fits him *like* a glove. に並行して He was built *as* a sword fish のような用法がある。*like* の代用形としてのこの *as* は使用頻度が高くなっている (Perrin, 1965, p. 676)。*as if/as though* の代用形の *like* (He ran *like* mad. 彼はまるで気が狂ったかのように走った。) は容認されている用法である (Bryant, p. 135)。

IV. like this/that

like this, like that は、前者は後方照応の、後者は前方照応の代用形として用いられねばならない (Quirk et al. §§ 10.51, 10.61)。

He told it ^{ like this } {*like that}: George was running down the road and...

この用法は this way/that way に並行する。

V. like + 前置詞

People get alarmed on each occasion on which (*like the present case*) dying children suddenly appear (H. W. Fowler, 1970, p. 335)/It is certain that now, *unlike the closing years* of last century, quotation from his poetry is singularly rare (Nicholson, 1957, p. 335) これらの例文における下線部はいずれも ‘unlike in...’, ‘like in...’ が本来あるべき形であり、統語的に相異なるものどうし (副詞の now と名詞句の the closing years) を結びつけて比喩することは誤りである。かといって The committee was *today*, like *yesterday*, composed of the following gentlemen (Nicholson, p. 317) としても、like が前置詞として名詞句を支配しなければならないことに反してしまう。おそらくこの現象は like と as の混用 (as を使った as it was yesterday の省略形が as yesterday) から生じたものと推測されるが、教育のある人々でもよく犯す誤用である(H. W. Fowler, p. 336)。

VI. like NP の位置

- (1) *Like his father*, he was an agnostic.
- (2) *Like his father*, he was said to be an agnostic.

(1)の下線部は ‘his father was an agnostic’ を含意し、(2)のそれは ‘his father was said to be an agnostic’ を含意する。もし(2)において単に ‘his father was an agnostic’ の意味を出すためには、比較するものどうしが埋め込み文になって ‘He was said to be an agnostic like his father’ 又は ‘He was said to be (like his father) an agnostic’ としなければならない (Wood, p. 141)。

on, upon

on < ME *on*, *an* < OE *on*, *an*

弱形の *an* は形がくずれて *a* になる : seven times *a* month < OE *on* dæze seofan siþun (Brunner, 1973, pp. 467-468)

upon < ME *upon*, *uppon* < OE *uppe*, *up+on*

一語としての *upon* は ME (13世紀) に誕生。その前身は「*up+on*」であろうが、OED は古代ノース語の影響も示唆している。同じ複合語の *into* はすでに OE に存在するが、*on* を内包する *onto*, *upon* はそれぞれ 16世紀, 13世紀と歴史が浅い点に *in* と *on* との本質的な意味の差がある (*into* 参照)。

〈*on* と *upon* の使用頻度〉

Bryant (1962, p. 152) は、小説、定期刊行物を対象にした調査 (*on* 92%: *upon* 8%) をもとに、書く場合には単純形を使う傾向にあるという。Partridge (1970, pp. 352-353) では、*upon* は形式的で強意的、書く場合には語調のよさから *on* より好まれることがしばしばある。話す場合には次第に使われなくなっている。上方への運動と接触を表わすには分離形 *up on* が必要とされると述べられている。これらの記載と、Perrin (1965), Wood (1962) 等に *upon* の記載が全くない事実は、この語の将来を暗示しているようである。

〈*on* の意味変化〉

原義は物体と物体との「接触」状態、ここから接触面という物理的場所を示すようになった。二次元の物体 (paper, floor, wall, roof 等) の面、三次元の物体 (box, cupboard 等) の面のいずれでもよいが、後者の複数面のうち特に最上部の面のみ要求する意味縮小も生じた (*on* the table/chair = *on top of* the table/chair)。原義の物理的接触から抽象的事物 (行為、状態等) の接触が生れた: *On his arrival Bill telephoned to Tom* (*on* = *when*, *as soon as*)/*victory on victory* (勝利に続く勝利)。二者間の接触状態からある行為や状態が継続中であること: *The house is on fire* (炎上中) / 副詞にも転用 *The movie is still on* (上映中)。この用法も、始動とその後の状態とが接触関係にあるという二者間の接触に還元できる。a book *on* chemistry (化学に関する本) / to talk *on education* (> a talk *on education*) (教育に関して話をする) などにも接触という原義が生きている。to go *on* a trip/*on* an errand などの成句に現れる *on* も行為そのものよりもその途中にあることを示す (小西, 1970, p. 61)。

〈*on* の選択〉

on the corner, in the corner, at the corner にみられるように、前置詞の選択は話者が対象物をどうとらえるかによってきまる (*at* 参照)。*He works *on* London は非文である (Leech, 1969, p. 185) のはロンドンという都市そのものと労働という概念が *on* (接触) によって意味論上結びつけようがないという理由によるが、He talked *on* London (彼はロンドンについて話した) は文法的文である。このように、対象物のとらえ方とそれが文中の他の要求と意味的にどのように結びつきうるのかを把握することが前置詞の選択には必要である。

〈stare on NP, a house on the river 等における *on*〉

(1) a boat *on* the river (川にうかんでいるボート) / to walk *on* the street (通りを歩く) 等においては接触する二つの物の存在は明らかである。a house *on* the river/road のように家と水面/道路面とが直接接触し合わない場合があるが、それは a house *on* the riverside の簡略表現であると考えられる。

(2) stare は *at*, *in(to)*, *(up)on* と共に起する動詞である。*at* は一点を, *in(to)* は内部を「凝視する」を表わすが, *(up)on* の場合はどうか。*(up)on* は二次元の事物、線 (line) や表面 (surface) との接触を示す (Leech, p. 159ff)。'There were insects... with eyes that stared *upon* him' (Lindkvist, 1976, p. 212) という時、昆虫の目と彼の間に視線という一本の線が存在する。この線を媒介として二者が接触していると考える。じっと見つめるという意味をもつ語句 (Fix one's eyes, set one's eyes) や注意を集中する語 (concentrate, focus) が *(up)on* と共に起し、そのような意味をもたない語 (glance) が共起しないのはこのような理由からである (glance は *(up)on* 以外の前置詞、例えば around, into, through となら共起するが、いずれもちらっとのぞく、ざっと見まわす、ざっと目を通すの意である: cf. 小西. 1975, s. v. glance)。

onto

into が OE 時代からすでに使われていたのに対し、同じ複合語の *onto* (又は *on to*) の歴史は16世紀に始まる。この事実は意外であるが、*onto* の誕生の

遅さはそれだけ必要性が乏しかったからであろうと推測できる。into と onto が移動の到達点を示す時、前者の方がはるかに必要性が高く、従って重要である。

- (1) Bill walked *into* the room.
- (2) Bill walked *in* the room. (*in*=*into*)
- (3) Bill walked *to* the room.

(1)と(2)は同じ意味をもちうるが、(3)は(1)、(2)とは同意ではない。内部という概念は必ず *in* で表されねばならず、*to* で代用することはできない。従って、内部への侵入を示しうる前置詞は *in* か *into* のいずれかである。

- (4) The ship ran *onto* the rocks.
- (5) The ship ran *on* the rocks.
- (6) The ship ran up *on* the rocks.
- (7) The ship ran up *to* the rocks.

(4)、(5)は(1)、(2)と同じ関係であるが、方向指示の副詞 *up* を添え onto の構成要素の *on*、*to* のいずれを使っても(6)、(7)は(1)、(2)と同じような状況を示すことができる (Cf. Lindkvist, 1976, pp. 164-165)。このように既存の語の組み合わせによって onto の概念を表わしたことが onto の誕生が16世紀まで遅れた最大の原因であろうと考えられる (事実、このようにして生れた *upon* は onto よりはるか以前 (13世紀) に出現していた)。

〈onto と on to〉

以下の場合を除き両語は交換可能である (*on to* は米語では使用制限あり (Quirk et al., 1972, § 6.12))

- (1) *on* が動作の継続を示す副詞である時：

Keep right *on to* the end of the road/to walk *on to* the next station.

- (2) *to* が不定詞の一部である時：

He went *on to* give an account of experiences.

(Wood, 1962, p. 165, Curme, 1963, p. 566)

〈onto と on の含意関係〉

onto は on を含意し, on は onto を前提とする。さらに off は on を前提とする。

Bill jumped *onto* the chair. $\frac{\text{含意}}{\text{前提}}$ Bill was *on* the chair.
← Bill jumped *off* the chair.
前提

接触面から離れることを表わす表現として, (to jump) off/off from/off of の三つがあるが, *(away) from on という言い方はない (off of は米語)。

★屈折時代の「on+名詞」, Gruber と Leech との onto の分析の違い, 「onto+NP」の文中における位置については into に準ずる (into 参照)。

than

(ME *thanne*, *than*, *thenne*, *then* < OE *ponne*, *pon*, *poenne*)

今日の than は本来, 時を示す副詞 then の古い形 (ponne) から発達したもの。それ故 then を時間に, than を比較構文にと区別して使われるようになるまでは then が比較構文中に用いられることがしばしばあった。after, before などと同様 then のもつ「時」の概念が「順序」の概念と結びつき, 今日の 'He is taller than I.' は古くは 'He is taller, then I come.' (彼の方が背が高く, その次が私だ) を意味した。この原義 (=時間) は今日の「時間」に言及する 'no sooner... than' の構文に残っているし, 又 'hardly (又は scarcely)... when' の代りに 'hardly (又は scarcely)... than' が使われることも than の先祖が then であったことと無縁ではない (Curme, 1935, pp. 274-275)。

than を関係詞とみるか接続詞とみるかについて意見の対立があるようだに, than の前置詞用法についても諸々の見解がある。

(1) 主節の定動詞が自動詞である場合 :

John is taller than { Mary.
her.

'her' のように目的格である場合, than は前置詞であるが, 'Mary' のように主格と目的格が同形, 即ち通格 (common case) である場合には, 話者が

Mary=her を意図しているなら than を前置詞に、Mary=she を意図しているなら、主節の補文要素のくり返し (John is taller than Mary *is tall*) が可能であるから、than を接続詞と見なすのが妥当であろう。than に形容詞や副詞が後続する場合 (It's much hotter today than yesterday/You arrived earlier than usual (又は necessary)) には than 以下の節化 'than it was hot yesterday', 'than it was usual (又は it was necessary for you to arrive)' (Quirk et al., 1972, p. 769) が可能である故、than は接続詞とみることができる。

(2) 主節の定動詞が他動詞である場合 :

John loves the dog more than *her*.

下線部 'her' は形態上は目的格であるため、直前の than は前置詞のように思われる。しかし、仮りに上文を 'John loves the dog more than he loves her' の縮約形と考えた場合でも、「her」は他動詞 'love' の目的語であって than のそれではない」ことに注意しなければならない。従ってこの than は前置詞ではなく接続詞であるとみるのが妥当である。

(3) than whom の場合 :

Here comes Mr. Smith, *than whom* no one is more famous in this town.

この場合の than は目的格 (whom) 以外の格を支配することではなく、まぎれもなく前置詞である。そしてこの用法以外には than の前置詞用法はないと考える学者もいる (大塚, 1959, pp. 82-83)。

(4) その他の場合 :

It goes faster than 100 miles per hour.

この文は *It goes faster than 100 miles per hour goes. のような節形式に拡張できないので than を前置詞ととらえるのがよいと考える学者 (Quirk et al., 1972, § 11.54, § 11.60) もいれば、Bresnan (1973) のように、John is more than six feet tall や John is taller than six feet のような文に対しても John is taller than Bill (is). のような普通の比較文と同じような埋め込み文を仮定することによって、than を補文標識 (即ち than 以下を節形式) と見なし than を接続詞としてとらえる見解もある。前者の見解については、速度に言及する表

現の ‘100 miles per hour’ を移動する実体 It と対等の立場にあるものとしてとらえているが、この考え方は意味論上明かにおかしい。むしろ ‘100 miles per hour’ を同じ速度表現の ‘faster’ と並列させて考えるべきであり、この点からみて後者の考え方の方が論理にかなっている。従ってこの than は前置詞ではなく接続詞である。

(5) 「自動詞+than+目的格」の構造について：

than 以下に定動詞が示されず目的格が主格の代役をつとめるこの構造 (John is taller than me) は、少なくとも近代英語初期には使われ始めており (Onions, 1974, § 136), 18世紀に入ると informal speech では頻繁に用いられた。この傾向は今日までひきつがれているが、informal writing においては容認度はきわめて低い (小野捷, 1980, pp. 328-329)。

(6) 「他動詞+than+通格」の構造について：

informal speech では使用度は高いが、than の直後の通格が主格か目的格かの形態上の判定が不可能である。informal English ではそのどちらの場合でも目的格が好まれ、formal English では両格を使い分ける傾向がある (Quirk et al., 1972, pp. 769-770) ことに注意しなければならない。

to

現代英語の to は OE *to*, 古代高地ドイツ語 *zuo*, *zua*, *zo* に由来し、これらはすべて原始インドヨーロッパ語の想像上の基体 *do- 'to, toward, upwards'* に吸収される (Klein, 1971)。OE のはるか以前は名詞の屈折形で示されていたと考えられ、それ故、本来独立した一語の副詞として存在していた *in*, *on*, *up*, *down* などと異なり、それだけ意味も弱く従って強勢も弱い。toward (後に発音変化により生じた [tɔ:(r)d] は別) に対する *inward*, *ónward*, *úpward*, *dównward* がもつ強勢の位置の違いがその証拠となる (上野, 1985)。

〈意味論及び統語論上の特徴〉

I. 移動動詞との共起

John walked up *to* the top of the mountain. という文に ‘but quit halfway

up (しかし途中でやめた)'をつけ加えると全体が非文になることから, to は「到達完了」の意をもつことがわかる。このことは leave, head など移動の出発行為しか表せない動詞に, 到達完了が不明である for や toward を添えることはよいが, *to leave X to Y, *to head to Chicago とはいえないことによっても裏づけられる。to と共に起する移動動詞は, move で代表される動詞 (fly, travel, walk, come, go, ski等) であり, それらは必ず出発点から到達点に至る移動の全行程を示しうるものでなければならず, 前出の出発行為のみ, 又は arrive などの到達行為のみを示す動詞であってはならない。一見 reach や arrive at と同じように到達行為のみを示すように思われる 'get to' も, 実は 'get from X to Y' の出発点表示の 'from X' が削除された構造で, get は move の意 (*Longman Dictionary of Contemporary English. s. v. get 9*) である。統語的には出発点のみ表示される場合 (to walk from X), 到達点のみ表示される場合 (to walk to Y), 両方表示される場合 (to walk from X to Y), いずれも表示されない場合 (to walk) があるが, 意味論的には, 全行程を示す動詞の背後には出発点と到達点が必ず存在していることを見逃してはならない。逆に言えば 'from-to' の背後には, たとえ状態動詞が存在しても, 移動の概念がかくれている (Lyons, 1977, p. 700)。

II. 移動後の状態の表示

移動動詞と共に起する前置詞は多くの場合, 同形で到達位置を表わす (John went *under* the tree → John is (was) *under* the tree) か, もしくは既出の語の一部を使って表わすか (John went *into* the room → John is (was) *in* the room) のどちらかである。この点において to は特異な語で 'John went *to* the station.' に対して 'John is (was) *at* the station.' といわねばならず (*Jhon is (was) *to* the station.' は非文になる (Leech, 1969, p. 199 によればスコットランド英語では 'He is away *to* the shops' いう用法はごく普通である)。「to ↔ at」の結合の原因は次のような点に求められよう。移動の全行程の両極に from と to で表わされる二点が存在する。この行程は切れ目のない直線であり, 'be *to* NP' で到達点における位置を表わそうとするのは, この直線から到達点だけ

を強引に切り離すことに等しい。同じことは *from* にもいえる。‘He is just from the station.’ は、出発直後の位置（駅を出発したところ）を示すことが出来ず、到達完了の位置 (He has just arrived here from the station) の意味をもつ。つまりは ‘from-to’ は分離不可能な結合体なのである。たゞ一つの例外は副詞的用法 ‘The curtain/lid is to.’ (カーテン／ふたが閉まっている) の場合だが、この用法には、*to* に名詞を後続させてはならないことと、主語の名詞句が指示示すものが本来あるべき（正常と考えられる）位置に到達していることが必要条件となる。

III. 後続名詞の条件

*John ran to the walking dog. が非文であることから *to* が支配する名詞句は移動しつつあるものであってはならないことがわかる。動いているものが到達点にはなりえないのは論理的には当然で、到達点を示すものが移動していくはそれ自体が移動の主体になってしまふ。その場合には John caught up with the walking dog’ のように同伴を示す語か ‘John passed by/beside Mary walking fast’ のように相対的位置関係を示す語を用いなければならない。以上のことから ‘John ran to the train/car.’ が正しい文であるためには、列車や車は静止していなければならぬことになる。

IV. *to* と *at* の含意関係

to が *at* を含意するという見解と必ずしもそうとはいえないという見解の対立がある。前者の立場をとるのは Leech (1969, p, 190) で、‘Having come/gone to the station, he was at the station’ は重複文であり、‘away from’ は ‘not at’ と意味上等しく、かつ ‘Before coming/going to the station, he was away from the station’ も重複文である故 *to* は *at* を含意する、と主張する。Lindkvist (1976, pp. 216-217) は、‘He come to me—He is with me’ / ‘He went to his room—He is in his room’ / ‘The boulder fell to the ground—The boulder is on the ground’ などが示すように *to* は必ずしも *at* を含意するわけではない、と考える。両者の例文をみる限りでは Lindkvist の見解には飛躍がみられる。第一例の *with* は同伴は示すが直接的に場所を示す語ではない（上野,

1987) こと、第二例の ‘He is *in* his room’ の前提文は ‘He wont *into* his room’ である (*into* 参照) こと。第三例の ‘The boulder is *on* the ground’ の前提文は ‘The boulder fell *onto* the ground’ であるべきであると考えられる。

V. 「to NP」の反復

Gruber (1976, pp. 85-86)によれば、一般的なもの→特定的なものの順序が好まれる。Jack sent the book to New York to Jill/*Jack sent the book to Jill to New York (ただし、to Jill in New York は可)

〈参 考 文 献〉

- Araki, K & M. Ukaji. (荒木一雄・宇賀治正明) 1984, 『英語史Ⅲ A』 大修館。
- Bresnan, J. W. 1973, “Syntax of the Comparative Clause in English”. *LI4*. pp. 275-343.
- Brunner, K. 1973. 『英語発達史』 松浪 有他訳。大修館。
- Curme, G. O. 1935. *Parts of Speech and Accidence*. 丸善。
- . 1963. *Syntax*. 丸善。
- Gruber, J. S. 1976. *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. North-Holland.
- Kusakabe, T. (日下部徳次) 1971. 『前置詞』(上) 研究社。
- Konishi, T. (小西友七) 1790. 『前置詞』(下) 研究社。
- Lindkvist, K-G. 1976. *A Comprehensive Study of Conceptions of Locality in which English Prepositions Occur*. Almqvist & Wiksell International.
- . 1978. *AT versus ON, IN, BY: on the Early History of Spacial AT*. Almqvist & Wiksell International.
- Leech, G. N. 1969. *Towards a Semantic Description of English*. Longman.
- Lyons, J. 1977. *Semantics 2*. Combridge UP.
- Onions, C. T. 1974. *Modern English Syntax*. Routledge and Kegal Paul.
- Ono, H. (小野捷) 1980. 『英語史概説』 成美堂。
- Otsuka, T. (大塚高信) 1959. 『シェイクスピア及聖書の英語』 研究社。
- Quirk, R. et al. 1971. *A Grammar of Contemporary English*. Longman.
- Ueno, Y. (上野義和) 1985. 「移動の方向を示す前置詞及び前置詞的副詞」『英米研究』 pp. 125-135. 大阪外国语大学。
- . 1987. 「前置詞とその原義」『英米研究』 pp. 139-150. 大阪外国语大学。

上　野　義　和

——辞　　書——

- Bryant, M. M. 1962. *Current American Usage*. Funk & Wagnalls.
- Fowler, H. W. 1970. *A Dictionary of Modern English Usage*. Oxford UP.
- Nicholson, M. 1957. *American-English Usage*. Oxford UP.
- Partridge, E. 1970. *Usage and Abusage*. Lowe & Brydone Ltd.
- Perrin, P. G. 1965. *Writer's Guide and Index to English*. 丸善。
- Wood, F. T. 1962. *Current English Usage*. MacMillan & Co Ltd.
- Klein, E. 1971. *A Comprehensive Etymological Dictionary of the English Language*. Elsevier P.C.

——×××

Longman Dictionary of Contemporary English. 1978.

OED